

京都部落問題 研究資料センター通信

第35号

発行日 2014年4月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

2014年度 部落史連続講座

第1回 5月30日（金） 描かれた河原者のくらし

— 絵画史料に見る四条河原の風景 —

講師：下坂 守さん
（日本中世史研究者）

第2回 6月 6日（金） 近世真宗教団における

被差別寺院の僧侶・門徒の本山参拝

講師：左右田 昌幸さん
（種智院大学）

第3回 6月20日（金） 近世都市の芸能興行と差別

講師：斉藤 利彦さん
（佛教大学）

* * * * *

時 間 午後6時30分～8時30分

場 所 京都府部落解放センター3階 第2会議室

参加費 無料

～参加希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールで連絡ください～

一九五〇年代のサークル詩活動と

部落民の表現

— 酒井真右と部落解放詩集『地ぞここからのうたごえ』 —

黒川伊織

(神戸大学国際文化学研究所協力研究員)

一. 詩「部落の仕事」との出会い

群馬県の被差別部落に生まれた青木みどりは、六〇年余り前に次のような詩を残した。

(前略) 兎を殺すのです／山羊を殺すのです／部落の人達は決して／心からそんな仕事をのぞんではいけません／悲しんでいるのです／百姓になりたい 勤め人になりたい／けれど耕す田んぼはなく／つとめるに口はありません

だから部落の人達は／かくれるようにして仕事をするんです／生きてゆくには働かなければなりません／部落の人達は／そりやとてもうまいんです／その殺し方といい皮のむき方といい／それだけによい悲しいんです／九生をその仕事からはなれられない部落民が／それ故に一つの

技術とまでしてしまった／その事が悲しいんです(後略)

私が「部落の仕事」と題するこの詩と出会ったのは、数年前のことである。図書館で何の気なしに『部落の現状(講座部落Ⅲ)』(部落問題研究所編、一九六〇年)を手に取り、頁をめくっていたところ、この詩が目飛び込んできたのだ。「部落の人達は／そりやとてもうまいんです／その殺し方といい皮のむき方といい／それだけによい悲しいんです」と、自らの心を引き裂き絞り出したこの表現に、私は強く惹きつけられ心揺さぶられた。

この数年、私は、一九五〇年代に共産党の文化運動の方針のもと各地で叢生したサークル詩運動の資料復刻や研究に携わる機会をもってきた(『デンダレ』『カリオン』『不二出版より二〇〇八年復刻』、

『われらの詩』[三人社より二〇一三年復刻]など。サークル詩運動をふくむ五〇年代の文化運動全般については、近年の研究をリードしてきた鳥羽耕史『一九五〇年代―「記録」の時代』

「河出ブックス、二〇一〇年」が参考になる。「部落の仕事」との出会いをきっかけに、私は、サークル詩運動のなかに部落民の表現を探しはじめ、酒井真右(一九一八〜一九九〇)の『日本部落冬物語』(理論社、一九五三年)と出会った。同書は、長く部落解放運動を担った酒井の代表作として知られるが、しかし、「未解放部落三百万のひと」との解放のためにうたわれた同書収録の詩編は、技術ばかりが先に立っているように感じられ、「部落の仕事」ほどに心奪われるような作品はなかった。さらに、私は、『日本部落冬物語』刊行の前年に酒井が『地ぞここからのうたごえ』と題する詩集を編纂していたことを知ったものの(本田豊編『群馬県部落解放運動六〇年史』[部落解放同盟群馬県連合会、一九八二年]に表紙写真のみが収められている)、粗末なガリ刷りで少部数発行されただけの同書を所蔵している研究機関・図書館はなく、ただ一カ所だけ所蔵していたのが、横浜の神

奈川近代文学館野間宏文庫であった。後述するように、酒井のよき理解者であった野間宏の存在なくして、同書が現在に残されることはなかっただろう。

神奈川近代文学館より入手した同書のコピーは、へたくそなガリ切りと落書きのような挿絵に彩られながら、部落の生活や差別の実態を無名の人々が告発した歴史の証言にほかならず、ぜひとも同書を紹介したいとかねてから願ってきた。その機会となった本稿では、一九五〇年代のサークル詩運動における酒井の詩業を踏まえたいうえで、酒井が編纂した『地ぞここからのうたごえ』に収められた詩を紹介していきたい。長く忘れられてきた六〇年前の無名の部落民の声に、耳を傾けていこう。

二. 一九五〇年代のサークル詩運動における酒井真右の立場

酒井真右の名がサークル詩運動にはじめてあらわれるのは、レット・ページにより教職を失職した一九四九年末頃のことである。新日本文学会に属した酒井は、『新日本詩人』『群馬文学』などに、自らの戦争体験やレット・ページの経験に題材をとった詩作を発表

しながら、「ぼんせんべい屋」として働き生活の糧を得ていた。この時期、朝鮮人作家・金達寿らが関わった『民主朝鮮』に詩を寄せたのははじめ、朝鮮人運動と親しい関係にあった酒井は、朝鮮人詩人・許南麒の『朝鮮冬物語』（朝日書房、一九四九年）を踏まえて自らの詩集を『日本部落冬物語』と名付けた。その刊行後まもなく、許南麒が同書に寄せた書評「虐げられた者の叫び」が『部落』に転載されたように（一九五三年六月号、初出は『図書新聞』）、当時の部落解放運動は「日本帝国主義によつてしいたげられた立場にある」朝鮮人との共闘を自明としていた。

サークル詩人としての酒井の詩業を確認しておく、幼なじみの戦死をうたった「写真」（『新日本詩人』一九五〇年九月号）は、『日本ヒューマニズム詩集』（三二書房、一九五二年）『祖国の砂―日本無名詩集』（筑摩書房、一九五二年）など当時のサークル詩運動の佳作を編んだアンソロジーにおさめられ、酒井の名を全国に知らしめた。また、酒井が主宰した詩サークル・群馬勤労者集団は、「日本一汚いサークル誌」とも評されたサークル詩誌『土と鉄』を粘り強く発行

し（一九五一年四月）、五〇年代のサークル詩運動を担う有名サークルとしての地位を占めることになる。このようにサークル詩運動に献身しながら、「部落冬物語」（『新日本文学』一九五一年五月号）ではじめて部落をうたった酒井は、サークル詩人としての活動とは別に、部落を題材とした詩作を『解放新聞』（部落解放全国委員会）や『部落』（部落問題研究所）に続けざまに発表していった。

酒井が、作家・野間宏（一九一五〜九一年）と出会ったのは、『人民文学』を介してのことだった。『新日本文学』からわかれた『人民文学』（一九五〇〜五五年）の主要な支え手であり、部落解放全国委員会の中央委員を務めていた野間は、「部落に於ける文化運動」（『部落』一九五二年七月号）で、「最近群馬勤労者集団を組織し、集団によって文化をひろめ、たかめ、ふかめて行く運動をおすすめている酒井真右は部落解放運動のなかから生れてきた一つの新しい文化要素」であると酒井を紹介し、その活動に大いに期待を寄せた。実際、野間は、自らが編纂したアンソロジー『わが祖国の詩』（理論社、一九五一年）に酒井の

「葬列で」（『解放新聞』四三号初出、『日本部落冬物語』収録）を「部落問題」を象徴する詩作として収録して、「部落問題」をサークル詩運動に突きつけようとしていた。この野間の期待にこたえるかたちで、酒井は、部落民による詩や俳句・短歌を集め、『地ぞこからのうたごえ』を発行したのだった。

三、部落解放詩集 『地ぞこからのうたごえ』（一九五二年）

一九五二年一月、『地ぞこからのうたごえ』が発行された。その発行所となった「全国部落解放委員会群馬県連合会」は、高崎の酒井の自宅におかれており、事実上酒井がひとりで発行を取り仕切ったようだ。冒頭で引いた青木みどり「部落の仕事」は、この『地ぞこからのうたごえ』に発表され、『部落』に転載ののち『部落の現状』に収められるという来歴をたどったように、同書に収められた詩は、その後『部落』や『解放新聞』に転載されたものが多い。部落民による詩作が同書のほかほとんどなく、同書の刊行が好意的に受け止められていたこともある。うが、しかし、同書に収められた詩が、その技術はさておき、部落の

現状を伝え解放への願いを鼓舞するという点で読者への訴求力の高い作品であったことが、転載の理由であったように思われる。

同書に詩・俳句・短歌を寄せた酒井のほか二二名の人々（小中学生五名）のほとんどが群馬に暮らす部落民だった（埼玉一名、京都二名「土方鉄・土方峰」を除く）。構成を確認しておく、序文とあとがき、『日本部落冬物語』にも収められた長編叙事詩「最後の夜明けのために」は酒井の手により、「幼きものうたごえ」「若者のうたごえ」「短歌・俳句」「地ぞこからのうたごえ」の各章に二二名の書き手による作品が配されていた。特筆すべきは、青木みどりをはじめ、一〇代後半から二〇代の若い女性の書き手が過半数以上を占めていることだ。当時のサークル詩運動のなかで女性詩人の活動が評価されることはほとんどなかったこととは対照的に、『地ぞこからのうたごえ』では女性詩人の活躍が目立つ。しかも、酒井や土方鉄など男性詩人の作品が、後述するようにに共産党の「五一年綱領」に忠実なアジテーション詩―日本革命によってこそ部落解放が可能となる―の枠組を脱せなかつたのに

対し、女性詩人の作品は、日常に深く刻み込まれた差別を題材としながら部落差別を静かに告発して、読み手の胸を打つ。そのように身近な暮らしをうたった佳作として、群馬勤労者集団の数少ない部落出身の女性サークル詩人・岡田ます枝が同書に寄せた詩「重たいふとん」の全文を、次に引いておこう。

長年の草履作りやなわないに／
かさかさになった手で／そして
そのために傷つけられて／しょ
ぼしよぼになった目で／それ
も／一生けんめいぼろを重ね重
ね／とぢあわせて／綿を一か
だけかぶせて出来上がったふと
ん／固く重たいふとんですが／
貧しい母が／社会へ出てゆく私
のための／心ずくしのふとん
です
私はある病院の看護婦室で／毎
夜そのふとんに／一日の疲れを
休めることになりました

秘められた部落民の悲しみは／
固く重たいふとんと共に／ふる
里の草履つくる母を／同じよう
な近所の大ぜいの人々を／思い
出さずにはいられないのです

同僚たちの／軽い綿ばかりのふ
とんを見る度に／貧しい部落の
生活を／ひしひしと身を感じる
のです

けれど／生れた時から味つてい
る／固く重たいふとんの感触は
／差別と貧乏にこねかためられ
て／育て上げられた部落民の身
には／ぴったりと快よいものな
のです

母の心ずくしのこのふとんは／
毎夜私にささやくのです／苦し
い部落の生活を／しいたげられ
たこの悲しみを／罪なき三百万
のうつぶんを／世の人々につた
えろと

ふる里を遠くはなれた私の胸に
／悲しくもなつかしい村人の顔
が／浮んでは消え消えては浮び
／私を上げましてくれるのです

『地ぞこからのうたごえ』に続
く第二弾のアンソロジーの題名が
『重たいふとん』と決まっていた
ように、『部落』に転載されてひ
ろく知られるようになったこの作
品を、酒井らは高く評価していた

ようだ。この詩は、「重たいふと
ん」にじつとりとしみこんだ根強
い差別が、一日の仕事に疲れた身
体を休めるはずの夜、彼女の身体
に執拗にまとわりつくさまを暗示
して秀逸である。私は、高校時代、
夏休みの読書感想文の課題で読ん
だ山崎朋子『サンダカン八番娼館』
(一九七二年)にある、元「からゆ
きさん」であるおサキさんが南洋
からただひとつ持ち帰ってきたと
いうせんべいぶとんのエピソード
を思い起こした。数十年前に多く
の客をとったボロボロのふとんで
眠るおサキさんと、「社会へ出て
ゆく」娘に母が贈った「心ずくし」
のふとんで眠る岡田ます枝は、仕
事は違えども、ともに「虐げられ
た者」としての苦しみを抱え込ん
で生きていたように思われたから
だ。彼女らの苦しみを受け止める
ふとんには、さまざま女性の生
がたたみこまれ、読者はふとんに
込められた彼女のたちの生の重み
と重荷に、自らの生を問いかける
のである。

『地ぞこからのうたごえ』に続
く第二弾のアンソロジーの題名が
『重たいふとん』と決まっていた
ように、『部落』に転載されてひ
ろく知られるようになったこの作
品を、酒井らは高く評価していた

このような女性詩人の詩と正反
対の立場にあるのが、男性詩人に
よる共産党の「五一年綱領」に忠
実なアジテーション詩の数々であ
る。ここでは、土方鉄(一九二七—

二〇〇五年)の詩「おっさん」の一
部を、『地ぞこからのうたごえ』
より引いておこう。

おっさん／こんな あほらしい
ことあるかいな／世の中は 高
いとこえ 土盛りでけるように
／あんじょうなってるんや／ヨ
シダちゅう わいらの気持 ちよつ
とも知らへん大金持の番頭が／
大臣になりやがって／アメリカ
さんに へいこらばっかりゆい
やがって／富士山まで取られて
しもうたゆう話やで／こんな
あほな話あるかいな／保安隊ゆ
うて 兵隊みたいなもん勝手に
こしらえやがって／そんな金が
あつたら／「めし食わせ」／
「仕事させる」／「家建てる」／
「子供に服くれ」ゆうて／いつ
ぱつ 市役所え どなりこんだ
ろうやないか／義やん・吉のおっ
さん・孝男・誰れもかもみんな
よんで／ええ おっさん!

『人民文学』への投稿(「小説
「淵」について」一九五二年六月号)
によって五〇年代の文化運動に登
場してきた土方は、一〇年にわたつ
た結核療養所での生活を終えて本
格的に詩や小説を書き始めたばか

本の紹介

吉村智博著『かくれスポット大阪』

今西 一

(大阪大学招へい教授・小樽商科大学名誉教授)

私はここ五、六年前からロシア極東、韓国、中国、台湾など、東アジアの各国を訪れる機会が、特に多くなつた。そこで確実に言えることは、日本を含めて各国とも、貧富の所得格差が、戦後最大になつてきているということである。日本でも六〇年代以降の高度経済成長は、もちろんエネルギー政策の転換などによって新しい「貧困層」を創りだしていった側面はあつたが、全体として八〇年代まで所得格差は縮まっていって、ところが、九〇年代のグローバル化以降、急速に所得格差は拡大し、戦後最大になつてきている。グローバルゼーションは、「新しい植民地主義」だと喝破した西川長夫氏の遺言は当たっている(『植民地主義の時代を生き延びて』平凡社、二〇一三年)。

だが最近の台湾の中国との「サービス貿易協定」に反対する学生デモなど、世界中で反グローバルゼーションの運動は広がっていくだろう。

私でも、卑近な例をあげれば、世間では「英語教育」が盛んに言われ、大学でもやたら「英語コース」が創られ、新しい教員の募集には「英語で授業ができること」という但し書きが付けられるようになってきている。しかし近年、NTTの国際電話をかけても、交換手に「どこにいるのか?」と聞けば、「インドのニューデリーです」という答えが返ってくる状態である。インドの平均賃金は現在でも五万円を切っている。しかも彼女らはネイティブな英語を話し、教育水準も高い。日本の若者がいくら高いスキル(技術)を身につけても、周縁諸国の安い労働力との競争を激化させれば、日本の若者の「ワーキング・プア」状態が改善されるとは思えない。それより「非正規雇用」を減らし、若者が働きやすい社会をつくるのが、急務であると考えている。

昨年の五月、私たちは著者の吉村氏に頼んで、大阪の釜ヶ崎や、飛田遊郭を案内してもらった。釜ヶ崎のあいりん労働福祉センターの

実態や、年金手帳を取り上げてい

る高齢者の旅館、飛田の公然たる

一、本書の内容

まず著者は、「序論」「絵図に

らとらえ返す作業は、これまでも積極的に取り組まれ」ていたが、「差別問題の歴史的研究は図像資料の利用なくしてはもはや成立しえない」ところまでできていると著者は断言する。これは、「身分制一般や被差別の側面だけに問題を収斂させてしまうのではなく、都市空間や村落共同体における部落の実像についての究明」が必要になってきているからである。「地域社会における差別問題の究明にとって、絵図の利用は必要不可欠」になってきている。

第一部の「エリア編」「道頓堀」で著者は、まず宮本輝の小説『道頓堀川』の引用からはじめるが、著者の幼年時代（一九七〇年代）の道頓堀は、「場末」の雰囲気のある空間であった。道頓堀は、江戸時代初期に東横堀川と木津川を東西につなぐために、成安（安井）道頓ら四人が開削したことで知られている。そこに「道頓堀八丁」として、九左衛門丁、吉左衛門丁、宗右衛門丁、九郎右衛門丁、太左衛門丁、立慶丁、御前丁、湊丁が今でもこの界限を代表する地名として残っている。

「町屋の形成とほぼ並行して、元和期（一六一五〜二四年）には、「遊女」による女歌舞伎が盛んになるが」、寛永六（一六二九）年に

禁止され、若衆歌舞伎がとって替わり、その後、若衆歌舞伎も承応元（一六五二）年頃から禁止され、野郎歌舞伎として再興する。

歌舞伎興行が盛んだった、延宝（元禄期（一六七三〜一七〇四年）にかけて、道頓堀の南側に芝居小屋が建ち並び、北側には芝居茶屋が軒を連ねた。ここでは「中の芝居」「角の芝居」「大西の芝居」などで大芝居が演じられたが、近代以降の「角座」「中座」「朝日座」「戎座」「弁天座」などの人気槽に引き継がれた。一九二〇年代になると、かつての芝居小屋が松竹によって一手に買収される。道頓堀の芝居小屋で映画、演劇、歌舞伎などの幅広い興業が行われる。

「千日前」千日前という地名が、有名な法善寺（寛永一四（一六三七）年創建）の千日回向からとられたことは、意外と知られていない。ここには、竹林寺という「慶安二（一六四九）年に創建され、江戸時代に「四力所」のうち道頓堀、天王寺、鳶田の三つの「長吏」（非人）の旦那寺になっていた寺院」もある。千日回向で人を集めていたが、二〇〇九年に天王寺区の勝山に移転した。また自安寺というかつての刑場に隣接した寺もある。絵図や案内書には、「墓所」のほかに、さきにもふれた「長吏」や、墓所の

の管理をする「三味聖」（隠亡）なども記されている。

『摂陽落穂集』（一八〇八年）によると、「例年七月十五日夜」、「七墓めぐり」といって、「お墓めぐりのツアーがあった」。七墓は近代になると市中から排除され、阿倍野、岩崎新田、長柄へ移転・統合された。ちなみに一八七三（明治六）年には太政官によって火葬が禁止され、隠亡は収入の道を絶たれた。七五年には、火葬が再度許可されるが、その時に請け負ったのは、のちに八弘社という葬儀会社をつくる西澤新右衛門ら八人で、三味聖とは縁もゆかりもない人びとであった。道頓堀の三味聖は、六つの坊舎に住んで、それぞれ婚姻関係や縁組みを結んでいた。

一方、「長吏」は、いわゆる非人頭のこと、悲田院（天王寺）、鳶田、道頓堀、天満の四力所の非人村（垣外）で生活しており、その下に小頭がおり、一般構成員にあたる若キ者、その配下の弟子といった序列があった。仲間内のことは「惣仲間作法」を作って執行し、垣内外の問題は高原会所で相談して行っていたが、その「御用」を悪用して「悪ねだり」する者もいた。

近代になって、ミナミが歓楽街

になって、千日前は一時期衰退するが、楽天地、芦辺劇場、千日俱樂部などが所狭しと軒をならべるようになる。一九二〇年代初頭になると、さらに南下して劇場街が形成され、弥生座、敷島俱樂部、南浜舞場などが林立し、一九三〇年代には、大阪劇場が開演して、大阪松竹歌劇団の公演、歌手や映画俳優の実演などが自慢であったが、一九九一年に再開発のために取り壊された。

「日本橋筋」日本橋は、江戸時代の公儀橋（幕府直轄の橋）のひとつで、紀州街道の交通の要衝であった。橋の南詰は立慶町と称されて、その辻以南は長町と呼ばれていた。すべて長町の名を冠して、新助町、甚左衛門町、嘉右衛門町、毛皮屋町、谷町、笠屋町などがあり、南端が長町筋茂助町となっていた。これらの町が元禄六（一六九三）年には長町一〜九丁目となり、寛政四（一七九二）年には一〜五丁目、日本橋一〜五丁目と改称された。それ以南の長町六〜九丁目（のちに三〜五丁目）には、旅人宿（旅籠）、木賃宿などが軒を連ね、「江戸時代中後期から明治時代にかけては窮民や貧民が多数生活の拠点とした」。「かつての町名を引き継いで「長町」（名護町、名呉町）と通称され、スラムとして名を馳せた」。

日本橋筋を西に入ると、そこはかつて関谷町と呼ばれていた地域である。これも江戸時代からの木賃宿が軒を連ねていたが、東関谷町には、「五階跡南裏」など、裏通りや路地に裏長屋が密集していた。大阪市や内務省の社会調査などでは、広田町とともにたびたび登場し、明治時代の新聞には「蜘蛛巣」などと揶揄されている。東関谷町のことを、「六道ヶ辻」と記した「細民調査」もある。

日本橋から南の紀州街道は、かつて「窮民」や「貧民」と呼ばれた人びとの生活拠点であった。江戸時代後期からたびたび取り締まりの対象になるが、特に一八九一年のスラム・クリアランスによって、長町の人びとはその周辺の東関谷町、広田町、下寺町、日東町へと移住する。「旧市中のスラム・クリアランスとその影響による周辺地域のスラム化」が、大阪環状線の内側と外側で分節されたのが、大阪の都市形成の特色である。

「釜ヶ崎」あいりん労働福祉センターは、朝の五時から動き出す。同センターは、一九七〇年の大阪万博の会場作りの日雇い労働者を「さばく」ために作られたものであるが、皮肉なことに完成したのは、万博が終了した一〇月であった。しかもセンターの設計図には、今のようなシャッターもなければ、監視カメラも載っていないかった。このセンターには、あいりん労働公共職業安定所がおかれているが、同所は普通のハローワークのように仕事を「紹介」しない。ここでは最高一日七五〇〇円の「失業（アブレ）手当」の支給をするだけである。仕事の「斡旋」は、同センターの「（公財）西成労働福祉センター」がやっている。ここは、一九六一年八月の起こったいわゆる「釜ヶ崎暴動」（「異議申し立て」）の翌月から開設された。

そもそも釜ヶ崎は、一九〇〇年代初頭は、「職工」と呼ばれる工場労働者の街であった。特に「電光社（舎）」とよばれるマッチ工場が建っていた。ところが大阪市内のスラム・クリアランスが本格化すると、木賃宿としての営業許可を取っていた釜ヶ崎に、多くの日雇い労働者が集まるようになった。そして大阪毎日新聞の記者村島婦之らは、「飛田界限は不具者と乞巧と盗人と怠け者の巢窟である」（『ドン底生活』一九一七年）という放ち、「貧民」「細民」という「社会の眼差」が、一九二〇年代の大阪の「市民社会」の形成のなかで生まれてきた。

第五回内国勸業博覧会は、実には五三〇万人もの人出があった。この博覧会には、海外植民地である台湾も参加させ、台湾、アイヌ、沖縄などの人びとを「展示」する「人類館事件」も起こしている。その跡地に、「ルナパーク」が開園し、通天閣が建てられたのは、一九一二年（大正元年）であった。現在の通天閣は、戦時下の鉄の供給で解体された後、地域の熱い要望で一九五六年に再建されたものである。

一九二五（大正一四）年に大阪市は、一八九七（明治三〇）年に続く第二次市域拡張を行った。その結果、「大大阪」（人口二二万人）となった大阪市は、大阪毎日新聞社の主催する「大阪記念博覧会」を天王寺公園と大阪城で開催した。入場者数は約一八九万人を数えた。しかし、天王寺公園の北側には、スラムがひろがっており、特に日本橋筋の界限には、通称「八十軒長屋」のほか長屋が軒を連ねていた。一九二七年に不良住宅地区改良法が施行され、大阪市はクリアランスを行った。地域の共同体関係も破壊されている。

また通天閣の一角は、「新世界」の名称で全国に名を馳せているが、その一角は南陽通商店街（ジャンジャン横丁）で、西成区の「飛田新地（遊廓）」に通じる繁華街として、大手の大阪土地建物会社によって開発された。

飛田新地は、近代になって開業した松島遊廓とならんで「二大本廓」と呼ばれた「事実上の遊廓」で、一九一八年に「貸座敷」として開業した。当時、買春をめぐっては、基督教婦人矯風会の流れを組んだ飛田遊廓反対同盟会と、開発をすすめる大阪土地建物会社との激しい対立はあったが、大阪府はこの時とばかりに、新世界の「私娼」を取り締まり、飛田に「公娼」を設置した。

「百済・平野」古代の百済滅亡の「渡来人」伝説のある百済駅から竜田越奈良街道に沿って進むと、平野郷町に出る。かつては環濠集落であり、平野部落もある。平野部落は、寛文九（一六六九）年の史料に「川原者」と記載されており、杭全神社の大祭で神輿の「さきばらい」などの清掃をしていたと伝えられている。部落の生業は、「皮革」「雪駄」などであったが、明治以降には石鹼工場や精麦工場などができて働いていたが、平野紡績工場では雇われなかった。

「北浜・太融寺」ここは大阪の自由民権運動の遺跡が多い。一八八二（明治一五）年七月、西浜部落の豪商山下茂十郎は自由党を結成

する。続いて九月に、近畿平権興道社が結成され、士族茂中達之らによって平権党も作られる。この党は「博徒」が「過半」を占めていたと言われている。

同年九月、松木正守らによって、大阪自由党が結成され、八七年まで、計八回の自由平権懇親会が開催された。ここでは、「新平民」から「車夫」まで組織されている。しかし、その中心は、「社会的地位の向上」を望む豪農・豪商であった。

民権運動の中心となる新聞も、一八七五（明治八）年に東区安堂寺町（現中央区平野町）で『大阪日報』が刊行される。同紙に小室信介や古沢滋らが参加し、八一年からは中島信行を社長として『日本立憲政党新聞』となる。民権運動には豪商たちも手を貸し、七八年の愛国社再興第一回大会は、鴻池駒次郎の別邸で行われている。また大阪で最も古い愛珠幼稚園は、三井糸店出身の市議員豊田文三と、民権家たちによって作られ（一八八〇年開園）、それを支えたのが船場の商人たちであった。

その北浜から中之島を経由して北に向かうと、太融寺がある。ここで一八八〇（明治一三）年、二府二二県の代表一一人が集まって、国会期成同盟の結成大会が行われ

たことは有名である。

「天神橋筋」天満には、大坂町奉行所の役人の屋敷があった。同心たちの業務は多忙で、その手下には、「垣外」の「非人」が抱えられていた。そのひとつに「天満垣外」があつて、与力町・同心の北側にあつた。天満垣外は、西成郡川崎村の管轄下にあつて、一八七二（明治五）年に競売にあい、落札されて大川沿いにあつた青物市場が移転してきた。現在は天満市場の新しいビルが建っている。

また天六近在は本庄・長柄のスラム街や木賃宿（簡易宿）街があり、大阪市の社会福祉事業の拠点と位置づけられている。米騒動の後、大阪府は方面委員制度を、大阪市は市民館などを創設した。市民館では、法律、金融、生業などの相談に応じている。

「舟場・北野」大阪も小学校の統廃合が進んでいるが、北野では戦前から在日朝鮮人の夜間学級が開かれていた、済美第五尋常高等学校が有名である。この地域は、方面委員制度の発祥の地であり、済生会病院の最初である本庄診療所が、一九一四年に開設した。済生会医療は、方面委員などを通じて、治療を必要とする人びとに「治療券」を公布して、貧富にかかわらず治療するものであった。

「中津」中津で有名なのは、

「淀川改良」の治水事業である。一九世紀の末に九〇九万円をかけて行われた大工事である。新淀川の改修工事によって、中津村では七割以上の住民が移住した。ここでは、部落の移転も行われ、後の奈良県の洞村移転のモデルとされた。

「京橋・大阪城公園」一九四五年八月一日の大阪大空襲で壊滅した大阪砲兵工廠跡地には、鉄のスクラップを持ち出す、マスコミから「アパッチ族」と呼ばれた人びとの集落があつた。大阪城に軍需施設が集まったのは、日清戦争を境としてであり、衛戍病院（陸軍病院）、輜重兵営、陸軍地方幼年学校などがあいついで建設された。

現在の大阪城公園には、「大阪城内の「友の会」というホームレスの自主組織がある。著書は、大阪府が全国で飛び抜けて生活保護率が高いことが喧伝されているが、これは「大阪は歴史的にも現状としても社会福祉の最先端をいく都市」だと締めくくっている。

著者の該博な知識の一部しか紹介できなかったが、実に豊富な話を書いていたので、是非、本書を一読していただきたい。他にも、「なにわ人物伝」として、久保田権四郎、鳥井信治郎、高倉藤平、

石井十次、沼田嘉一郎、新田長次郎らを、社会事業の側面から紹介している。そして、「食肉文化と屠場」「有隣小学校と徳風小学校」「四カ所と七墓」「皮革業と銀行」「なにわの塔物語」といった「トピックス編」があり、最後に補論として「『大大阪』と被差別民」がついている。

二 本書の論点

すべての問題に触れる紙幅も力量もないので、絵図と著者の近代「被差別民」論についてだけ感想を書きたい。絵図と「近代的」地図の関係については、前から気になっていた点で、絵図には「穢多」「隠亡」などの身分標識が書かれている。丹後の絵図には、「鉢」という中世の系譜を引く「雑賤民」の記載が貼り付けてあるものもある（拙著『近代日本の差別と村落』雄山閣、一九九三年、四三頁）。

本来近代的な地図のうえには、身分呼称は残らないはずである。日本では、周知のように寛政一二（一八〇〇）年から文化一三（一八一六）年にかけて伊能忠敬が作った「大日本沿海輿地全図」があり、一八七七年に出された文部省の「日本全図」から八四年に陸軍参謀本部測量部が作成した「輯製二〇万分の一図」まで、すべて伊能

の大図、小図が基になっている。著者の言っている地租改正の時の「地籍図」は、耕宅地の測量を行ったもので、地域の全体を知るものではない。しかも地租改正では、三角測量法は使われておらず、三角測量による日本地図が完成するのは、一九一三年である（織田武雄『地図の歴史 日本篇』講談社、一九七四年、他）。これは近代地図の登場が遅いと見るのか、伊能図のレベルが高かったと見るのか、評価の分かれる所である。地図の歴史的评价はあるにせよ、絵図の身分表記については、いつまで続くのかなど興味深い問題がある。

著者は、補論「『大図』と被差別民」のなかで、実に興味深い「被差別民」論を展開している。大阪三郷（天満組・北組・南組）と称された時代から、武士らが居住する天満、寺院が集住する上町、表店・裏店を仕切る船場・西船場・島之内・堀江といった中心地域の周縁に被差別民が居住していた。穢多、非人、隠亡などは、身分ごと三郷の接続村に組み込まれ、市中（オールドシティ）が形成されていた。

のは、墓場、塵芥処理場、屠場、避病院や監獄などの隔離・収容施設、遊廓・貸座敷などの遊興施設であり、旧市中の外縁部に布置されていった。近代市民社会では必要不可欠しながら「賤視の対象」となった。これらは、一九一九年の「都市計画法」の施行前から移転・統廃合の対象となった。ここには、「身分制社会における都市の周縁化の系譜を継承しつつ、排除と包摂の帰結として」、被差別部落・寄せ場・スラムに近接するか、あるいは内部に重層的に組み込まれた。このようなインナーリングの延長線上に一九二五年の第二次市域編入が行われ、『大図』の「もうひとつの顔」として、差別が刻印される。

その具体例として、ディープ・サウス（深淵なる南部）といわれる釜ヶ崎の日雇い労働者、西浜・西成の皮革業、アトラクティブ・ノース（魅力的な北）といわれる長柄・本庄の簡易宿街、舟場の履物修繕業などが、紹介される。

そして最後に、小河滋次郎が一九一三年に結成した救済事業研究会が紹介される。特に著者は大阪の市民館、方面委員制度、私立夜間学校、済生会、改良住宅などの都市公共事業の先駆性を強調する。これは、こうした都市の公共性を

切り捨てる、今日の橋下市政などの「新自由主義」政策への著者の批判と読むのは、私の思い込み過剰であろうか。

本書は、最初に書いたように、一般向けのガイド・ブックとして書かれたものとしては、実に良心的で良質なものである。これに理論的な批判を加えるのは、野暮であることを知りつつ、評者の責任から二、三の注文をつけておくことにする。

長年京都の研究をしてきた私から見ると、大阪は飛田などの遊廓でも、圧倒的に近代社会が創ったものが多い。飛田などは、近代遊廓と言ってもいいもので、京都の島原や祇園などは大きく異なる。この伝統的遊廓と近代遊廓の断絶の問題は、もっと考えられてもいいのではないだろうか。しかも近世でも、穢多、非人、遊廓、役者街など「悪所」の周縁化はあり、これと近代のクリアランスが、どう繋がり、繋がらないのか、もう少し知りたいところである。

それは釜ヶ崎などのスラム街にも言えることで、近代的労働者の街から日雇い労働者の街に変わるのには、日清戦後からの人の移動の問題があり、周辺農村からの労働力の移動という前提があったからである。ここでは周辺の農村の解

体と大図の膨張という問題も、視野に入れる必要があるのではないだろうか。

この労働力の移動という問題を考える時には、著者の関心が、部落問題から来ていることもあって、「オールドカマー」や「ニューカマー」である沖縄や朝鮮人、中国人、台湾人などの問題が入らないのは残念である。著者は、最初から「独自のガイドブック」がある生野区などを避けると書いているが、国内外の植民地からの人の移動の問題は、大図だけでなく、近代都市論や「差別の重層性」を考える時、避けられない問題だと考えている。これは、今までの「部落史」研究の問題点であるとも考えている。

最後の「公共性」の評価も、方面委員などの先駆性はわかるが、これが支配の道具として機能したことは、著者は十分知っているはずである。この小著に書き込むのは難しいだろうが、「公共性」の機能を手放して評価できないことも附言する必要があるだろう。

小さな大作に、勝手な注文をつけたが、今後、著者に教えてもらいながら、一緒に考えていきたい問題でもある。妄言多謝。

（解放出版社、二〇一三年一月五日、一三〇〇円＋税）

紹介

菅蒲革とはどういう革なのか

—竹中友里代著『八幡菅蒲革と石清水神人』

のびしようじ

(西播地域皮多村文書研究会)

皮革制作を行うも被差別視とは遠い位置にあった石清水八幡社「革染座」(収録史料1 嘉元元年文書)であったが、江戸後期の皮田身分への差別強化の風潮のなかで、いつしか周囲の差別の視線を感得するようになる。維新と同時に製造機器のみならず記録類をも焼却する挙に出、以後固い沈黙を守ってきた。近代初頭に廃絶したため、菅蒲革は著名でありながら実相のほとんどわからないものとして近年まできた。初期は諸説あつて確かたしない。一八世紀後期革一枚で銀五枚の価(史料17『城州八幡愚聞鈔』 銀一枚||銀四三匁)もする高級ブランドとして牡牛皮の鞣革より高価であった。

半に題簽通りの論稿、後半に未公開新出史料四二点が丁寧な解題を付して収められている。巻頭には九州大学服部英雄の序文がおかれ、科研費「被差別民衆史・研究方法論」の成果であると明記されている。新出史料で構成されているため、従来知られている『諸式留帳』の訴訟記録、『男山考古録』など周知の文献、あるいは石清水八幡宮所蔵の刊本史料集などは見合わせられている。論稿では既知の史料をも駆使して展開されているが、言うまでもなく新史料が開いた世界が軸となっている。総合的な究明が俟たれているともいえよう。

竹中が解明した成果は多岐にわたる。課題意識の中心にあったのは菅蒲革献上主体の区分と実態の解明である。菅蒲革を制作工程としてみれば、革細工―仕上げ染め―白革鞣し―前処理―原皮、の諸段階から構成される。①染革は科

手町西口から南に入った大谷居住の「神宝所神人」九人の下で製造された(実際には配下染革職人)②下地となる鹿白革は科手町「朱印百姓九拾六人」の頭家(安居百姓連判状代表)を含む一〇人程度(史料41では二家)の白革師が鞣しを行った。尤も寛政からは大坂塩町白革屋三人が鞣しを行う。この二点が前半の論旨、後半は献上・贈答の実態解明であり、幕末朝廷への献上に尽力する過程が明らかにされている。

こうみてくると積み残したのは竹中も自覚している通り菅蒲革の「製造工程」が大きい。

● 研究とは厄介な代物である。一つの事実が解明されると直ちにその先に十以上の疑問が湧き出す。澄んだ頭脳で明晰な整理がなされれば、不可思議なことであるが、より一層多くの課題や問題が浮かびあがってくる。そのことを一番自覚するのは誰であろう著者本人である。どんな論点が出てくるのか。皮革史の観点から若干を挙げる。

①秀吉が八幡惣中に宛てた判物写(史料3)は「燻革三枚」であつて染革ではなかった。菅蒲革はブランドの総称であるが元来は八幡黒

革を指し、反復染めの濃い藍染一色のことであつた。となると両者をどう整合的に理解すればよいか。②鹿皮鞣しとはいかなる鞣製法であり、本当は誰の手でどこで鞣されていたのか。先の『城州八幡愚聞鈔』は科手白革師の中に皮屋があり「滑皮・燻皮」さらに染革までも家業にしていたという。はたしてその真偽は。③一枚金三〇四両の値段で大名などの要請に応え「神人らの莫大な収入源」になつていた、としながら他方では原皮の極端な入手難に見舞われたとも指摘している。安政四年八幡二階堂村から白革株と畿内周辺一〇カ国死牛馬株の支配願いが出された折、死牛馬株礼金百両に対して白革株は四〇〇両に設定されていた(史料5)。高い利益が目論まられていたのである。整合性が求められるとともに実態がどうであつたかが問われる。

● 労作の刊行を喜び多くの方が手にとられることをお奨めしたい。

(服部英雄研究室刊、平成26年3月、地域資料叢書12、A4判86頁、1600円+税)
発売・花書院(〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102)

研究としての部落解放運動 小森龍邦

広島県内の相次ぐ差別事件とその背景を考える 岡田英治

広島県水平社創立90年と教科書 香渡清則

妊婦健診未受診妊産婦問題からみた子育て・子育て環境—「親子問題」が露呈される背景要因をふまえて 井上寿美

障害者が高等教育へ進む道を拓くために 秋風千恵

ハンセン病療養所の将来—長島愛生園と菊池恵楓園の将来構想をめぐる比較分析 吉崎一

在日韓国・朝鮮人の高齢化と外国人福祉問題—広島市西区通所介護福祉現場の事例を通して 安錦珠

「在日コリアン」の日本国籍の取得に関する意識の計量的分析 伊藤泰郎

部落解放研究 200 (部落解放・人権研究所刊, 2014. 3) : 1,400円

特集 人権・部落問題研究の課題と展望

総論

今後の部落解放運動の方向・手法と課題 北口末広／差別禁止法の動向と研究会発足について 内田博文

啓発 部落解放・人権大学講座のカリキュラムのあり方 上杉孝實

人権 人権CSR研究の成果と課題 菅原絵美

教育

人権教育と市民力 市民性教育をめぐる研究の成果と課題 平沢安政／学力保障と地域教育をめぐる研究の成果と課題 高田一宏

歴史

身分論から差別論・穢れ論・境界論・地域社会論へ—歴史学・民俗学・人類学・宗教学などの成果 前近代部落史研究の課題と展望 吉田勉／近現代・被差別部落の類型論に向けて 近現代部落史研究の課題と展望 小林丈広

部落解放研究くまもと 67 (熊本県部落解放研究会刊, 2014. 3)

「ボシタ」が消えた日 小松裕

史料紹介 山鹿郡上御宇田村検地帳 橋口和孝, 山本尚友 明治四年の道後温泉入浴差別事件—全国部落史研究大会に寄せて— 花田昌宣

熊本の被差別部落史編さん通信 山本尚友

部落解放ひろしま 94号 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2014. 1) : 1,000円

特集 相次ぐ県内の差別事件—取り組みと課題

部落問題研究 207 (部落問題研究所刊, 2014. 3) : 1,058円

特集 「行き倒れ」とその救護から見るイギリス近代・現代日本・首都東京

イギリスにおける救貧法制と「行き倒れ」 小室輝久／今日における行旅病人及行旅死亡人取扱法の対象者像—2000年以降における「行旅死亡人の公告」をもとに 鈴木忠義／「行旅病人及行旅死亡人取扱法」施行後の東京府における「行き倒れ」とその対応行政に関する基礎的検討 竹永三男

本願寺史料研究所報 46号 (本願寺史料研究所刊, 2014. 2)

近世後期の本願寺における産所について—広如・徳如期の事例を通して— 長瀬由美

ライブラリー・リソース・ガイド 6 (アカデミック・リソース・ガイド刊, 2014. 2) : 2,500円

東日本大震災と図書館—図書館を支援するかたち 熊谷慎一郎

特集 図書館で学ぶ防災・災害 嶋田綾子

司書名鑑 2 谷合佳代子 (大阪社会運動協会・大阪産業労働資料館)

リベラシオン 153 (福岡県人権研究所刊, 2014. 3) : 1,000円

特集 2013年度部落史講座

生きることが闘いだっただ！水平社以前・黎明期の解放運動—解放令、筑前竹槍一揆、復権同盟、九州平民会、鎮西公明会— 石瀧豊美／海外から見た水平社宣言 駒井忠之／水平社創立の舞台裏—日本社会主義同盟 廣畑研二 史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 14—『全九州水平社史料集(仮)』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 18 福沢諭吉『福翁自伝』を読む(続き)—福岡藩の蘭学と解剖 11— 石瀧豊美

資料紹介 生活の柄 71—「近世民衆史の泉」改め— 竹森健二郎

映画紹介 『ハンナ・アーレント』 吉田到

和歌山研究所通信 47 (和歌山人権研究所刊, 2014. 3)

私と和歌山大空襲と秋月時代 大賀正行

『賤者考』と被差別民 矢野治世美

- 地域と人権京都 663** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 2. 15) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 26 「総点検委員会の報告」を再検討する 川部昇
- 地域と人権京都 664** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 3. 1) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 27 川部昇
- 地域と人権京都 665** (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 3. 15) : 150円
同和奨学金返還問題の検討 28 川部昇
- であい 622** (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 1) : 150円
第65回全国人権・同和教育研究大会 特別報告 「三番叟まわし」を受け継いで 辻本絵蘭人権文化を拓く 194 『ある精肉店のはなし』の話 内田樹
- であい 623** (全国人権教育研究協議会刊, 2014. 2) : 150円
第65回全国人権・同和教育研究大会 特別報告 「三番叟まわし」を受け継いで 2 辻本絵蘭人権文化を拓く 195 ヘイト・スピーチ法規制をめぐる 師岡康子
- 同和教育論究 特別号** (同和教育振興会刊, 2012. 3) : 3,000円
近世真宗差別問題史料 (特別編) —「起居筆記」— 左右田昌幸
- ヒューマンJournal 207** (自由同和会中央本部刊, 2013. 12) : 500円
部落解放運動40年を振り返って 10 「多い方がいい」からの脱却 灘本昌久
- ヒューマンライツ 310** (部落解放・人権研究所刊, 2014. 1) : 525円
特集 憲法から考える私たちの暮らし 不屈の闘志と懐の深さから学ぶことの必要性—ネルソン・マンデラさんの訃報に接して 友永健三
被差別部落の歴史 前近代編 1 寺木伸明
- ヒューマンライツ 311** (部落解放・人権研究所刊, 2014. 2) : 525円
特集 ヘイトスピーチをのりこえる 被差別部落の歴史 前近代編 2 寺木伸明
- ヒューマンライツ 312** (部落解放・人権研究所刊, 2014. 3) : 525円
特集 2014年、いま福島で 差別禁止法を求めて 12 いまこそ当事者が声をあげるとき 谷川雅彦
被差別部落の歴史 前近代編 3 寺木伸明
- ひょうご部落解放 151** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2013. 12) : 700円
部落解放研究第34回兵庫県集會報告書
- 部落解放 688号** (解放出版社刊, 2014. 1) : 1,050円
第44回部落解放・人権夏期講座報告書
- 部落解放 689号** (解放出版社刊, 2014. 2) : 630円
特集 部落のひとり親家族実態調査から 座談会 部落出身であること、女性であること、シングルマザーであること 坂根政代, 塩谷幸子, 齒山山加代 / 結婚差別の諸相 神原文子 / 被差別部落のひとり親家族における部落 (民) アイデンティティとその継承について 宮前千雅子 / ひとり親家族の生活を支える被差別部落の社会資源 熊本理抄 / 被差別部落におけるひとり親家族の母親の就労と生活 大西祥恵
本の紹介 奥田均著 『「人権の間」をつくる』 藤池弘人 人種主義と植民地主義の告発 ネルソン・マンデラが残した遺産 武者小路公秀
水平社論争の群像 14 部落委員会活動 朝治武
- 部落解放 690号** (解放出版社刊, 2014. 2) : 1,050円
部落解放研究第47回全国集會報告書
- 部落解放 691号** (解放出版社刊, 2014. 3) : 630円
特集 東日本大震災・福島第一原発事故から三年 本の紹介
『ヘイトスピーチとたたかう!—日本版排外主義批判』 (有田芳生著) / 『取調べ可視化論の展開』 (小坂井久著) / 『マオキッズ—毛沢東のこどもたちを巡る旅』 (八木澤高明著) / 『自立を混乱させるのは誰か—障害者の「自立」と自立支援』 (慎英弘著) / 『日本に生きる北朝鮮人 リ・ハナの一步一步』 (リ・ハナ著) / 『チャーシューの月』 (村中李衣作, 佐藤真紀子絵)
新たな部落解放運動への挑戦 水平社100年にむけて 赤井隆史
朝鮮人虐殺の歴史を忘れない 関東大震災時に虐殺された朝鮮人の追悼を続ける「ほうせんか」 神林毅彦
江戸の華が復活 皮革の町で新年の門付芸「鳥追」と「女太夫」 川元祥一
水平社論争の群像 15 高松結婚差別裁判 朝治武
- 部落解放研究 20** (広島部落解放研究所刊, 2014. 1) : 1,000円

人権の“館” 高麗神社とその周辺 仲尾宏

国際人権ひろば 113 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2014. 1) : 350円

特集 原発事故と原発輸出

狭山差別裁判 445号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2013. 4) : 300円

特集 狭山50年を考える

しこく部落史 16号 (四国部落史研究協議会刊, 2014. 2) : 1,000円

特集 第19回全国部落史研究大会

前近代史分科会報告

近世庄内における芸能興行 佐治ゆかり／土佐藩における博士集団の組織展開と活動 山本琢

近現代史分科会報告

秘録 岡山県特高警察資料—日本社会主義同盟と水平社— 廣畑研二／差別撤廃に取り組んだ香川の警察官 山下隆章

全体会講演

近現代における『三番叟まわし』の実相—「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進事業から見えたもの— 南公代／「ちょんがり」の精神史—「歌」と「運動」の相関関係— 五藤孝人

人権と部落問題 853 (部落問題研究所刊, 2014. 2) : 630円

特集 在日コリアンの歴史と生活

20周年を迎えたコリアタウン 高賛侑／猪飼野の風景 足代健二郎／生駒・宝塚の巫俗を生業とする韓寺略記 曹奎通／韓国済州島から大阪猪飼野へ—聞き取り・戦後在日コリアンの歩み— 二宮一郎／朝鮮学校と高校無償化問題 鄭甲寿

現地報告 島根県 『はだしのゲン』閲覧制限が問いかけたもの 片寄直行

本棚 曹奎通著『在日の歌 知らざる故国 何ぞ恋しき』 喜多タケ子

文芸の散歩道 鏑田研一著『第三の太陽』—無産者の政党設立をめざした時代の実録小説 桑原律

人権と部落問題 854 (部落問題研究所刊, 2014. 2) : 1,155円

特集 「3.11」三年の現実

人権と部落問題 855 (部落問題研究所刊, 2014. 3) : 630円

特集 労働者の使い捨てを問う

季刊人権問題 374号 (兵庫人権問題研究所刊, 2014. 1) : 700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 12 住民から見た「八鹿高校事件」前夜 ノン・フィクション「1974年の秋 1」 朝倉紀子

振興会通信 113 (同和教育振興会刊, 2013. 11)

同和地区における真宗事情調査 九州地方中間報告 「同和地区における真宗事情調査」委員会

同朋運動史の窓 20 左右田昌幸

参考図書紹介 畑中敏之・朝治武・内田龍史編著『差別とアイデンティティ』

真宗 1318号 (真宗大谷派宗務所刊, 2014. 1) : 250円

人の世に熱あれ人間に光あれ 16 「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら？」 川端裕敏

真宗 1319号 (真宗大谷派宗務所刊, 2014. 2) : 250円

人の世に熱あれ人間に光あれ 17 真宗大谷派同和関係寺院協議会

真宗 1320号 (真宗大谷派宗務所刊, 2014. 3) : 250円

人の世に熱あれ人間に光あれ 18 真宗大谷派同和関係寺院協議会

信州農村開発史研究所報 122・123号 (信州農村開発史研究所刊, 2013. 3)

広報紙と人権問題—『浅科村公民館縮刷版』に見る足跡— 川向秀武

史料紹介 小諸藩領の部落の元「頭」の資力 斎藤洋一

信州農村開発史研究所報 124・125号 (信州農村開発史研究所刊, 2013. 9)

惟善学校用地払い下げ願い 斎藤洋一

史料紹介 塩名田宿の「御分間御絵図御用宿方明細書上帳」 千葉藤哉

地域と人権 1134 (全国地域人権運動総連合刊, 2014. 3. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 33 学者の貢献 10 丹波正史

地域と人権京都 660 (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 1. 1) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 24 「同和施策」と地域・住民の変化 2 川部昇

地域と人権京都 661 (京都地域人権運動連合会刊, 2014. 1. 15) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 25 「同和施策」と地域・住民の変化 3 川部昇

- 解放新聞 2659号** (解放新聞社刊, 2014. 3. 17) : 90円
解放の文学 95 ハッピー著『福島第一原発収束作業日記』
音谷健郎
- 解放新聞大阪版 1983号** (解放新聞社大阪支局刊, 2014. 3. 15) : 70円
部落解放同盟大阪府連合会第61回定期大会 一般活動方針 (第1次案) 討議資料
- 解放新聞京都版 980号** (解放新聞社京都支局刊, 2014. 3. 10) : 70円
安易な障害者観を問う 佐村河内さんの曲捏造事件から
渡辺毅
- 解放新聞奈良県版 994号** (解放新聞社奈良支局刊, 2014. 2. 10) : 50円
主張 部落民は恐れられているのが実情、いったい何故か。2
まちづくり運動のための史料紹介 9 大和国葛下郡東山村関係史料 辻本正教
- 解放新聞奈良県版 995号** (解放新聞社奈良支局刊, 2014. 2. 25) : 50円
2014年度一般運動方針 (案) 特集号
- 解放新聞奈良県版 996号** (解放新聞社奈良支局刊, 2014. 3. 10) : 50円
主張 部落民は恐れられているのが実情、いったい何故か。3
- 解放新聞兵庫版 793号** (解放新聞社兵庫支局刊, 2014. 1) : 50円
新春対談 石元清英・坂本三郎
- 解放新聞広島県版 2123号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 1. 15)
昭和史の中のある半生 1小森龍邦
- 解放新聞広島県版 2124号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 1. 25)
昭和史の中のある半生 2 小森龍邦
- 解放新聞広島県版 2125号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 2. 5)
昭和史の中のある半生 3 小森龍邦
- 解放新聞広島県版 2126号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 2. 15)
昭和史の中のある半生 4 小森龍邦
- 解放新聞広島県版 2127号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 2. 25)
昭和史の中のある半生 5 小森龍邦
- 解放新聞広島県版 2128号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 3. 5)
昭和史の中のある半生 6 小森龍邦
- 解放新聞広島県版 2129号** (解放新聞社広島支局刊, 2014. 3. 15)
昭和史の中のある半生 7 小森龍邦
- 解放新聞福岡県版 490号** (解放新聞社福岡支局刊, 2014. 1) : 50円
「黒田家過去帳」記事問題で宗派教区と意見交換
- 架橋 30** (鳥取市人権情報センター刊, 2014. 2)
報告 分田山林闘争とは 国府人権福祉センター地域調査・研究事業に携わって 田川朋博
架橋でめぐる全国の人権機関 和泉市立人権文化センター資料室～旧南王子村の歴史と文化を伝える
- 語る・かたる・トーク 227** (横浜国際人権センター刊, 2014. 1) : 500円
「解放教育」継承への扉 24 初めての全同教報告で突きつけられた言葉 外川正明
- 語る・かたる・トーク 228** (横浜国際人権センター刊, 2014. 2) : 500円
「解放教育」継承への扉 25 うちの町内の人、みんなのことやろ! 外川正明
- カトリック部落差別人権委員会ニュース 149** (日本カトリック部落差別人権委員会刊, 2014. 1)
講演要約 「差別とアイデンティティ」 朝治武
- かわとはきもの 166** (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2013. 12)
靴の歴史散歩 111 稲川實
皮革関連統計資料
- 京都部落問題研究資料センター通信 34号** (京都部落問題研究資料センター刊, 2014. 1)
報告 2013年度部落史連続講座2
本の紹介
太田心海著『自叙で綴る梅原眞隆の生涯』 神戸修／『差別とアイデンティティ』一関係の大海をどう泳ぐか一 井岡康時
収集逐次刊行物目次 (2013年10月～12月受入)
- グローブ 76** (世界人権問題研究センター刊, 2014. 1)
京の「獣魂碑」 白石正明
被差別部落に関する歴史資料アーカイブズ化を目指して～オーストラリア先住民による文化の保護・促進に学ぶ～ 友永雄吾

収集逐次刊行物目次 (2014年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

朝田教育財団だより 20 (朝田教育財団刊, 2014. 2)

朝田はなさん 部落解放運動を支え続けた妻・母・祖母
松井珍男子

明日を拓く 101・102 (東日本部落解放研究所刊, 2013. 12) : 2,100円

特集1 教育特集

統一用紙四〇周年を考える 松浦利貞 / 「統一応募用紙」
40周年と同和教育 (人権教育) 桐畑善次 / 「こんにち
は、関宿の今井です。」 「また来ます。」 今井勝 / 出
会い直す私の部落 浅井誠 / 私と同和教育 川向秀武 / 大
沢敏郎の識字宇宙 楠原彰 / いのちと向き合う識字～寿
識字学校主宰 大沢敏郎さんの仕事～ 吉田浩司 / 大沢敏
郎さんからの宿題 島田一生

特集2 狭山特集 / 石川さん逮捕当日の「上申書」と「脅
迫状」

本の紹介 藤沢靖介著『部落・差別の歴史』を読んで 中
村久子

アリーナ2013 15号別冊 (中部大学総合学術研究院刊,
2013. 5)

特集 占領期京都を考える

座談会「占領期京都の記憶」 正木通夫・辻ミチ子・山
本時子

IMADR-JC通信 176 (反差別国際運動日本委員会刊, 2013. 12) : 750円

特集 レイシズム 日本そして世界

ウイングスきょうと 120 (京都市男女共同参画推進協
会刊, 2014. 2)

図書情報室新刊案内

上野千鶴子著『ニッポンが変わる、女が変わる』 / 関橋
眞理著『世界の女性問題 1 貧困、教育、保健』

解放新聞 2652号 (解放新聞社刊, 2014. 1. 27) : 90円
結婚相談サービス業のCM解禁の動きに関しての要望書
部落解放同盟中央本部

解放新聞 2653号 (解放新聞社刊, 2014. 2. 3) : 90円
解放の文学 93 琉球文化の底流を探る 池上永一『黙示
録』 音谷健郎

解放新聞 2654号 (解放新聞社刊, 2014. 2. 10) : 135円
2014年度一般運動方針 (第1次草案)

解放新聞 2655号 (解放新聞社刊, 2014. 2. 17) : 90円
解放の文学 94 住井すゑ『橋のない川』 音谷健郎

解放新聞 2657号 (解放新聞社刊, 2014. 3. 3) : 90円
ぶらくを読む 85 首都江戸の被差別民史研究—再び関東
部落史を考える 湧水野亮輔

解放新聞 2658号 (解放新聞社刊, 2014. 3. 10) : 90円
今月の本@ランダム

『かくれスポット大阪』 (吉村智博著) / 『ヘイト・ス
ピーチとは何か』 (師岡康子著) / 『私の絵日記』 (藤
原マキ著)

事務局よりお知らせ

◇のびさんの紹介にある八幡での白革 (鹿革) づくりについては、『京都の部落史』でも八幡品手村と
天部・六条村との度重なる争論などがとりあげられています。今回ご紹介いただいた竹中友里代さんの
『八幡菖蒲革と石清水神人』では、「同じ皮革生産に携わる者同士が、類職を嫌い、白革独占を主張す
る分別の根拠はどこにあるのであろうか。(中略)本稿では菖蒲革を素材にして石清水の近世社会に存
在する諸身分の構造的な把握の具体化を目指すものである。」「管見の限り現存する菖蒲革関係の史料
を渉猟し提示することに努めた」とされていて、とても興味深い一冊です。当センターでも配架してい
ますので、是非ご利用ください。

◇今年度の部落史連続講座の日程が決まりました。ふるってご参加ください。

◇昨年度の部落史連続講座の講演録ができあがりました。ご希望の方はメール・FAXでご連絡ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分